
フロリロール

坂田火魯志

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

フロリロール

【Nコード】

N7776C

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

ダキア。そこにいる美しい娘フロリロールに恋をしたアポロン。愛の女神のアドバイスを受けて青い太陽の花を彼女に捧げようとするが。チコリーのお話です。

第一章

フロリロール

ルーマニアに伝わる古い話である。この国がダキアと呼ばれていた古い時代だ。ある村に優雅な物腰に愛らしい顔立ちをした娘がいた。娘は黄金色の透き通るような髪と澄んだ青い目を持っていた。そんな彼女のことを人々は花の貴婦人、フロリロールと呼んだのである。

彼女は美しいだけでなくこの上なく奇麗な心の持ち主であった。慎ましやかで心優しくそうしたところも愛されていた。しかし彼女に声をかける者はいなかった。

あまりにも美しく声をかけられなかったのだ。それは太陽の神であるアポロンも同じであった。彼は彼女の美しさを太陽を曳いている時に見てから心を奪われてしまった。しかしその気持ちをどうしても伝えることができないでいたのである。

「困ったことだ」

オリンポスにある自身の宮殿の中で一人呟いていた。

「あれだけ素晴らしい娘はいないというのにどうして」

「言えないのですか？」

彼の従者である鳥が彼に問うてきた。ト、ト、ト、と彼の足元に来て尋ねる。

「言える筈がないんだ」

憂いに満ちた顔で鳥に答える。普段は輝かしい太陽神の顔が完全に憂いで沈んでしまっていた。神々しい金髪も今では弱い光しか放つてはいない。

「とても」

「それは困りましたね」

鳥はそれを聞いて溜息をついた。

「御自身から言えないのでは何もなりませんよ」

「それはわかっているさ」

鳥に顔を向けて答える。

「けれど。それでも」

「そうですか」

「ねえ鳥」

信頼している従者に対して問う。

「私は一体どうすればいいと思う？この場合は」

「結構難しい話ですね」

鳥は首を傾げて言ってきた。賢さでは評判の彼もこれには少し困ってしまっただ。

「御言葉ですがゼウス様ならあれです」

「牛に化けたり雨に化けたりしてだね」

「そう、それで想いを遂げられますが」

実際にゼウスはそうやって多くの浮名を流している。しかしアポロンはゼウスとは違う。とてもそんな気にはなれない。こうしたことでゼウス程積極的ではないのである。

「それは無理ですよ」

「できれば悩んだりしないさ」

首を横に振って述べる。

「とてもね」

「そうですね。お困りなんですね」

「それも否定しないよ」

アポロンはまた言った。

「どうすればいいのかわからないよ、実際に」

「それではアポロン様」

ここで鳥は主に言ってきた。

「何だい？」

「他の神様に相談されてはどうでしょうか。申し訳ありませんが私ではあまり力になれそうにありませんし」

「他の、だね」

「そうです」

鳥はそう提案するのだった。真面目な顔で。

「ここは。如何でしょうか」

「そうだなあ」

それを聞いて今まで頭を抱えていた手を組む方に変えた。そのう
えでまた言うのだった。

「それじゃあこういう場合はアフロディーテかな」

言わずと知れた愛の女神である。彼女に相談してみようと考えた。

「やっぱり」

「そうですね、アフロディーテ様ならこの場合は間違いはないと思
います」

「うん」

アポロンもその言葉に笑顔で頷く。顔が明るくなってきた。

「じゃあ決まりだ。そうしよう」

「そうです。では」

「今から行こう、思い立ったが吉日だ」

こうして彼はアフロディーテのところに向かうことになった。こ
のとき彼女は花園の中で一人花々を見て楽しんでいた。アポロンは
そこにやって来て彼女に声をかけるのだった。

「あら、アポロン」

アフロディーテはこの時見事な金髪を風にたなびかせてその色香
漂う顔にうっとりとした笑みを浮かべて花々を見ていた。アポロン
に声をかけると彼に顔を向けてきた。

「どうしたのかしら、ここに来て」

「うん、実はね」

「あつ、待って」

言おうとしたところでアフロディーテに一旦止められた。彼女は
身体は花に向け、顔はアポロンに顔を向けて話をしていただった。
「当ててみるわ。私のところに来て」

次にアポロンの顔を見る。それからまた言う。

「その思い詰めた顔は。誰か好きな人ができたのね」
「うん」

アポロンとてその為に相談しに来たのだ。隠しはしなかった。
「そうなんだ、実はね」

その思い詰めた顔でアフロディーテに言った。

「いいかな、それで」

「ええ。それで相手は誰なの？」

今度はその相手が誰なのか尋ねた。そうやって巧みに話を聞いて
いつていた。

第二章

「神様？それともニンフ？」

「実は人間なんだ」

アポロンは思い詰めた顔のままそれも述べたのだった。

「名前はフロリロール。知ってるかな」

「フロリロール！？ああ、彼女ね」

アフロディーテはその名を聞いて納得したように頷いた。彼女がフロリロールを知っているのはその仕草から明らかであった。

「彼女だったの。可愛いから当然ね」

「それでなんだ」

あらためてアフロディーテに言う。

「告白したくてもできなくて。どうすればいいかな」

「上手くいくわよ」

アフロディーテはにこりと笑ってこうやってきた。

「安心して。それは確かよ」

「そうなのかい！？」

「私は愛を司る女神。こうしたことは全て私の中」

そのにこりとした笑みで語ってきた。

「だから。任せておいて」

「愛の女神にだね」

「そうよ。誰かが誰かを愛するというのは当然のこと。それが神であってもね」

「それじゃあ僕は」

「ええ。胸を張っていいのよ。ただ」

「ただ？」

アフロディーテがここで言葉を変えてきた。アポロンはそれに気付き声をかける。

「何かあるのかい？」

「あるわ。恋にはつきものだが」

「それはまさか」

アフロディーテが何を言いたいのかわかった。アポロンも顔を曇らせる。

「どんな結果になっても。後悔はしては駄目よ」

彼女はアポロンの顔をじっと見詰めて言ってきた。

「いいわね、それで」

「うん」

アポロンもそれに頷く。彼も覚悟を決めたのだった。

「それでもいい。それじゃあ教えてくれ」

アフロディーテに頼み込む。どうすればフロリロールの心を手に入れられるのかを。

「僕は……どうすればいいんだ？」

「青い太陽の花を彼女にプレゼントするの」

「こうアポロンに言うのだった。」

「青い太陽の花を!？」

「そうよ。それを最初に彼女にあげれば彼女は貴方に永遠の愛を誓うようになるわ」

「フロリロールが僕を」

「いい?それでね」

アフロディーテはさらに言ってきた。アポロンもそれを聞く。

「最初によ。それが果たせないと彼女は貴方のものにはならない」

「終わりなんだね」

「ええ、わかったわね。青い太陽の花よ」

「それを最初に彼女に捧げれば」

「彼女は貴方に永遠の愛を」

その言葉を聞いた。アポロンはそれからずっと青い太陽の花を探した。しかし花は中々見つかりはしない。まるで幻の中にあるように見つかりはしなかった。

「青い太陽の花」

自分の神殿の中で休むアポロンはその名を一人呟いて水を飲む。喉の渴きは癒されたが心の渴きは癒されない。普段は落ち着く筈の神殿の中も落ち着きはしない。

「何処にあるんだ、それは」

それが何なのかさえもわからない。あてもなく探し続け気ばかりがはやる。神といえどどうにもならないまでの心の乱れようであった。

「何処に」

「アポロン様」

そこに彼を心配してやって来た者がいた。忠実な従者である鳥だった。

「お話は聞いていますよ。青い太陽の花ですよね」

「そう、青い太陽の花なんだ」

アポロンは神殿の奥で石の椅子に座って項垂れていた。しかし彼の言葉に顔を向けて応えた。表情も項垂れて暗く沈んだものになっていた。

「探してもない。何処にあるのかさえも」

「青い太陽の花」

鳥はここで考える顔をアポロンに見せてきた。そのうえで呟いた。

「ひよっとすると」

「心当たりがあるのかい？」

「ひよっとするとですよ」

そう主に断る。

「あの花かな、って思ってますよ」

「あの花って」

その言葉を聞いて半ば無意識のうちに身を乗り出していた。そうして鳥に問う。

「どんな花なんだい！？教えてくれ」

「少し待って下さい」

鳥はこう答えてきた。焦る主に対して彼は穏やかな顔をしていた。

「その花を持って来ますので」
「うん、頼む」

アポロンは鳥にその花を持って来てくれるように頼んだ。それから暫くして鳥は青く小ぶりな、丸い花を持って来たのだった。アポロンはその花を見て言った。2

「その花がそれなのか」

「野原の片隅に咲いていたんです」

鳥は主にその花を差し出して言った。

「まだ生まれたばかりで広まってもないみたいですけれど」

「そうなのか。それで見つからなかったのか」

「多分。そうだったかと」

「名前もないのかい？」

アポロンは今度は花の名前を問うた。しかし鳥はこの問いに首を横に振った。

「わかりません。生まれたばかりですから多分」

「そうか。何もないんだな」

「そうなんです。けれどアポロン様」

鳥はまた言った。

「これをその人に差し上げればそれで」

「そうだ。それじゃあ」

「すぐに行かれるといいです」

急かすように言う。アポロンもその花を受け取って頷く。そうしてそのままルーマニアのフロリロールのところへ向かうのだった。

第三章

彼女が何処にいるかわかった。野原だ。緑に覆われた野原にいるとわかっていた。そこに行けば彼女が笑顔で待っている。アポロンはその笑顔を自分のものとする為に今駆けていた。その手に鳥が自分に渡してくれた青い花を持って。ひたすら駆けていたのだった。

野原に着いた。フロリロールのいる野原にそこには彼女が一人佇んでいる筈だった。

そう、筈だった。そこには確かに彼女がいた。しかし彼女だけではなかった。そこにはもう一人、若く奇麗な顔立ちの男がいたのであった。

「え………」

アポロンは彼の姿を見て立ち止まってしまった。彼の手には自分が持っているのと同じ青い花があった。どうやら彼も見つけていたようだった。そしてその花を今フロリロールの手に渡していたのだった。

「そんな……私は間に合わなかったのか」

「アポロン様………」

そこに鳥が来た。そっと主の肩に止まる。

「すいません、私が見つけるのが遅かったばかりね」

「いや、御前のせいじゃない」

しかし彼はこう言っ彼を慰める。

「運命だったんだ、これは」

「運命ですか」

「彼女と私は結ばれない運命だったんだ」

アポロンは俯いて言った。

「だから。こうなったんだ」

「あの、それでも」

「いいんだ」

幸せそうに笑い合うフロリロールと恋人が見える。見る度に辛いがそれでも今は見ているしかなかった。それしかできなかった。

「けれど」

「けれど？」

「この花はまだ名前がなかったよね」

「え、ええ」

鳥は主の言葉に戸惑いながら頷く。その小さな動作が如何にも烏らしかった。

「そうですけれど」

「そうか。それじゃあ」

アポロンは手の中の花を見ていた。それを見ながら今言うのだった。

「この花の名は私が名付けよう」

「名前を」

「そして。世の中に広まるんだ」

じっと青い花を見ていた。そのうえで言う。彼はまた言った。

「名前は」

「どうするんですか？」

「太陽の花嫁だ」

彼は青い花をそう名付けた。

「このことをずっと忘れないように」

「そうですか。いい名前ですね」

「私の恋は破れた」

アポロンはそれは認めた。認めるしかなかった。

「しかしだ。想いは残る、永遠に」

「だからですか」

「花よ、拡がれ」

その太陽の花嫁を放り投げて言う。花は野原に落ちるとそのまま拡がっていく。そうして瞬く間に全世界に拡がったのであった。

「そうして私の想いを永遠に伝えてくれ。この果たせなかった想い

を」

そう言うだけであつた。破れた想いに対して泣きながら。彼は今涙を花に委ねて破れた恋を噛み締めるのだった。

これがこの青く小さな花チコリーが世界に広まったはじまりである。チコリーにはこうした悲しいはじまりがある。しかしそれを知る者はもうあまりいない。古い破れた恋のはじまりであるといふことは。

フロリロール 完

2007・5・4

広告募集中

小説関連広告に最適です。

出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7776c/>

フロリロール

2008年11月7日09時00分発行